

SNS

使用態度尺度とインターネット依存尺度（IAT）との 関連性の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-01-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩, 井上, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000048

SNS 使用態度尺度とインターネット依存尺度 (IAT) との関連性の検討

学芸学部 心理学科 川上 正浩
富山大学大学院 医学薬学教育部 井上 真理子

要旨：川上 (2023a, 2023b) は、高校生、大学生を対象に、SNS 使用態度について測定が可能となる包括的な尺度を作成した。この尺度は、「ネガティブ表出」、「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の 10 因子からなる尺度である。一方、インターネット依存の程度を測定する尺度として、Young (1998) の Internet Addiction Test (IAT) がある。この尺度については、川上・井上 (2023) が、日本の大学生を対象にデータを収集し、因子分析の結果、「囚われ」、「本業劣後」、「依りどころ」、「過剰使用」、「ネット優先」の 5 つの因子を抽出した。本研究では、川上 (2023a, 2023b) の SNS 使用態度尺度と、Young (1998) の IAT との相関を検討した。相関分析の結果、インターネット上での「炎上」については、必ずしもインターネット依存傾向をもつことに起因するわけではないことなどが示された。

キーワード：インターネット依存、IAT (Internet Addiction Test)、SNS 使用態度、炎上

問題と目的

令和 2 年度の内閣府青少年のインターネット利用環境実態調査 (内閣府, 2021) によれば、高校生のインターネット利用率は、男子で 98.5%、女子で 99.3% であり、全体の 98.9% がインターネットを利用して。もっとも利用の多い「スマートフォン」での内容を見てみると、高校生男子では、多い順にコミュニケーション (メール、メッセージ、ソーシャルメディアなど) が 91.5%、動画視聴が 89.1%、ゲームが 88.7% となっている。一方、高校生女子では、コミュニケーションが 95.2%、動画視聴が 90.3%、音楽視聴が 87.1% である。こうしたインターネット利用についての調査としては、内閣府 (2023) による青少年のインターネット利用環境実態調査のような大規模なものや、小・中学生のインターネット利用 (津田他, 2015)、中学生の SNS 利用 (佐久間, 2020; 佐久間他, 2021)、中高生のインターネット利用 (伊藤, 2011; 豊田, 2015)、高校生のインターネット利用 (西村・遠藤, 2009)、大学生のインターネット利用 (北田, 2019)、大学生のスマートフォン利用 (都筑他, 2020; 松田, 2020; 正司・吉村, 2020)、大学生の Twitter 利用 (宮代, 2019; 若山, 2019) 大学生の SNS 利用 (青山, 2018; 飯田, 2020; 二口他, 2020;

北見・清水, 2019; 高谷, 2017; 山下・松林, 2015; 中村, 2017) など、その利用実態についての調査も数多く行われてきている。

そして、こうした調査においても明らかにされてきた社会的なコミュニケーションの変容に伴い、インターネットの過度な利用と、それに伴い生活や健康に支障をきたす、いわゆるインターネット依存と呼ばれる問題も指摘されるようになった。

Griffiths (2005) によれば、インターネット使用には、耐性 (tolerance)、重要視 (salience)、気分の変化 (mood modification)、引きこもり (withdrawal)、葛藤 (conflict)、再発 (relapse) といった、薬物依存に近い次元 (dimension) が含まれており、インターネット依存は、薬物依存に近い特徴を示す。Young (1998) もこの点を指摘し、インターネット依存は社会的にも注目されている。日本においても、インターネット依存に関する研究は多く認められる (たとえば藤井, 2019; 井上・小嶋, 2018; 稲垣他, 2017; 片山・水野 (松本), 2016; 宮城他, 2020; 澤井・福岡, 2018; 瀧, 2016; 田ノ上・田邊, 2020; 鄭・野島, 2008 など)。

Young (1998) は、こうしたインターネット依存の程度を測定するための 20 項目からなる Internet Addiction Test (IAT) を提案した。IAT では、それ

ぞれの項目に対し、たとえば、「睡眠時間をけずって、深夜までインターネットをする (Do you lose sleep due to late night log-ins?)」ことが、「全くない (not at all) : 1」から「いつもある (always) : 5」の5件法で回答を求めることにより、20項目の合計点によって回答者のインターネット依存の程度を判定する。たとえば、この合計点が70点以上であれば、生活に重大な影響をもたらす高いインターネット依存であると判定される。

IATは、基本的にはその20項目の「総点」がインターネット依存の程度を表すと考えられているが、一方で、その多因子構造を指摘する研究もあり(たとえば川原, 2021)、岡安(2016)によれば、その因子構造は、文化的背景や対象者の属性によって異なっているとされている。

川上(2022)は、高校生、特に、内閣府(2021)の調査においても、男子に比べて、よりインターネットの使用率の高い女子高校生に焦点を当て、IATを実施し、改めて因子分析を行った。日本の女子高校生49名を対象としたデータを用い、最小二乗法、Promax回転による因子分析を行った結果、「囚われ」(「インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが」、「次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが」、「過剰使用」(「インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが」、「インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが」など)、「本業怠慢」(「インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが」、「インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが」、など)、「気晴らし」(「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」、「日々の生活の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることが」、「ネット優先」(「誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが」、「配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが」)の5つの因子が抽出された。

さらに、川上・井上(2023)は、日本の大学生196名を対象に、IATを実施し、改めて因子分析を行った。その結果、「囚われ」(「次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが」、「インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをして

いるところを空想したりすることが」、「本業劣後」(「インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが」、「インターネットをしている時間が長いと周りの人から文句を言われたことが」など)、「依りどころ」(「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」、「インターネットの無い生活は、退屈でむなしく、つまらないものだろうと恐ろしく思うことが」など)、「過剰使用」(「インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが」、「インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが」、「ネット優先」(「誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが」、「配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが」)の5つの因子が抽出された。このように、青年期の日本人を対象にYoung(1998)のIATが実施され、その因子構造については、ある程度明らかになってきていると言える。

また一方で、インターネット利用の多くの割合をSNS上でのコミュニケーションが占めることを受け、SNSに関わる心理学的な研究も増加している(たとえば藤井, 2021; 正木, 2018; 西村, 2020)。

川上(2023)は、SNSをTwitter, Instagram, LINE等と定義したうえで、SNSの使用に対する態度について独立に測定することを意図した尺度を構成することを旨とした。このため、複数の先行研究(たとえば、藤・吉田, 2009; 濱口・金子, 2021; 久保他, 2015; 前田, 2021; 松島他, 2017; 能仁他, 2022; 小倉・藤本, 2019; 大野, 2019; 岡安, 2016)で用いられている、インターネット、スマートフォン、SNS等の使用に関する尺度について、表記の統制や項目の修正を行ったうえで、高校生、大学生、大学院生合計190人を対象にデータを収集した。最尤法、Promax回転による因子分析の結果、「ネガティブ表出」、「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の10因子53項目からなるSNS使用態度尺度が構成された。

インターネット依存、と言われるような社会的問題は、どのような態度から生まれるのか、本研究ではこれを明らかにすることを目的とする。そのため、川上(2023a, 2023b)のSNS使用態度尺度と、Young(1998)によって作成されたInternet Addiction Test(IAT)とを同時に実施する。そして、インターネット依存とされているような行動傾向が、どのような

SNS 使用態度と関連をしているのかについて分析することを目的とする。

方法

調査実施日

調査は 2022 年 8 月から 2023 年 9 月に実施された。

調査対象者

近畿圏の女子高校に所属する高校生 39 名（女性 38 名、性自認不明 1 名）、中部圏の大学に所属する大学生 50 名（男性 27 名、女性 20 名、性自認不明 3 名）、近畿圏の大学院に所属する大学院生 2 名（男性 2 名）が調査に参加した。調査対象者の年齢は 17 歳から 23 歳であり、平均年齢は 19.0 歳 ($SD=1.72$) であった。

質問紙の構成

本研究で取り扱う質問紙は、①川上 (2023a, 2023b) によって作成された SNS 使用態度尺度、②Young (1998) によって作成された Internet Addiction Test (IAT) の 2 つの尺度を含んでいた。

①川上 (2023a, 2023b) の SNS 使用態度尺度 (53 項目) については、ネガティブな内容・感情を SNS で表出する態度である「ネガティブ表出」(11 項目)、SNS に対して依存的な態度である「依存的な使用」(6 項目)、SNS 上の他者との比較によりネガティブになる態度である「対比ネガティブ」(5 項目)、SNS 上で賞賛されることを求める態度である「賞賛希求」(5 項目)、SNS 上での批判等を心配する態度である「拒否不安」(6 項目)、SNS 上での暴露に対して不安を感じる態度である「暴露不安」(7 項目)、SNS 上でのやり取りにハードルの低さを感じる態度である「ハードルの低さ」(2 項目)、SNS 上でのやり取りの継続を義務と感じる態度である「継続義務感」(3 項目)、SNS 上でのトラブルを容認する態度である「炎上容認」(5 項目)、SNS 上でのやり取りは情報のやり取りであるとする態度である「情報共有」(3 項目) の 10 の下位尺度からなる尺度である。ただし、本研究においては、川上 (2023) で参加者に呈示された因子分析実施前の 72 項目がそのまま呈示された。

これらの項目に対して、「全くあてはまらない (1)」から、「よくあてはまる (5)」までの 5 件法で回答が求められた。項目は一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

②Young (1998) によって作成された Internet Addiction Test (IAT: 20 項目) については、「インターネット」に対する依存の程度を測定するための尺

度である。「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」のように、文の途中で止められた質問項目に対して、「全くない (1)」、「ときどきある (3)」、「いつもある (5)」の 5 件法で、普段の生活についての評定を求めるものであった。項目は一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

手続き

大学教員が担当する、高校生向けの心理学系講義の講義時間中 (2022 年 8 月)、大学生向けの心理学系集中講義 (2023 年 8 月)、大学院生向けの心理学系集中講義 (2023 年 9 月) に質問紙が配付され、調査対象者は集団でこれに参加した。調査対象者には個人ペースでこれらに回答することが求められた。

結果

各尺度得点の算出

SNS 使用態度について、川上 (2023a, 2023b) が構成した尺度に倣い、尺度構成を行った。すなわち、「ネガティブ表出」、「依存的な使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の 10 の下位尺度について、それぞれ適切な逆転を施した上で、平均点を下位尺度得点とした。これらの平均値、標準偏差、 α 係数について算出し、表 1 に示した。 α 係数は、「情報共有」が .412、「炎上容認」が .567 とかなり低い値であったが、それ以外の下位尺度については、いずれも .70 以上の値が得られた。

Young (1998) によって作成された IAT については、まず全 20 項目の平均点を算出し、これを個人の IAT 得点とした。さらに、川上・井上 (2023) の分析結果に倣い、尺度構成を行った。すなわち、「囚われ」、「本業劣後」、「依りどころ」、「過剰使用」、「ネット優先」の 5 つの下位尺度について、それぞれ適切な逆転を施した上で、平均点を下位尺度得点とした。これらの尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数について算出し、表 1 に示した。 α 係数は、IAT 得点で .897、川上・井上 (2023) に基づく下位尺度構成においては、「依りどころ」が .566 とやや低い値を示したが、それ以外については、いずれも .60 以上の値が得られた。

SNS 使用態度尺度と IAT との相関

SNS 使用態度の各下位尺度について、IAT 得点、およびその下位尺度得点との相関係数を算出し、この結果を表 2 に示した。なお、相関係数については、

表1 各尺度の平均得点、標準偏差、アルファ係数

	変数名	N	平均値	標準偏差	α係数
SNS使用態度尺度	ネガティブ表出	91	1.77	0.72	.862
	依存的使用	91	3.11	1.19	.888
	対比ネガティブ	91	2.36	1.07	.853
	賞賛希求	91	2.02	0.82	.790
	拒否不安	91	2.38	1.03	.842
	暴露不安	91	2.19	0.85	.804
	ハードルの低さ	91	3.32	1.21	.740
	継続義務感	91	2.31	0.96	.701
	炎上容認	91	2.26	0.76	.567
	情報共有	89	3.71	0.82	.412
Internet Addiction Test	囚われ	90	2.08	1.00	.613
	本業劣後	91	2.51	0.90	.787
	依りどころ	91	2.25	0.84	.566
	過剰使用	91	3.06	1.23	.638
	ネット優先	91	2.20	1.07	.814

Cohen (1992) に倣い、 $|r| = .10$ を効果量小、 $|r| = .30$ を効果量中、 $|r| = .50$ を効果量大と判断した。以下、効果量中以上の有意な相関について列挙する。

まず IAT 得点については、ネガティブ表出、依存的使用、ハードルの低さとの間に、効果量大の有意な正の相関が認められた。また、対比ネガティブ、賞賛希求、拒否不安との間に、効果量中の有意な正の相関が認められた。

IAT の下位尺度得点に関しては、囚われが、ネガティブ表出、依存的使用、賞賛希求との間に、効果量中の有意な正の相関を示した。本業劣後は、ネガティブ表出、依存的使用、対比ネガティブ、賞賛希求、拒否不安、暴露不安、ハードルの低さとの間に、効果量中の有意な正の相関を示した。また、依りどころについては、ネガティブ表出、依存的使用、ハードルの低さとの間に、効果量中の有意な正の相関を示した。過剰使用については、依存的使用との間に効果量大の、ネガティブ表出、賞賛希求、ハードルの低さとの間に効果量中の、有意な正の相関を示した。ネット優先については、ネガティブ表出との間にのみ、効果量中の有意な正の相関を示した。

考察

本研究では、川上 (2023a, 2023b) の SNS 使用態度尺度と、Young (1998) によって作成された IAT 尺度との関連について、検討を行った。IAT 尺度全 20 項目の平均値に基づいた IAT 得点に関しては、ネガティブ表出、依存的使用、対比ネガティブ、賞賛希求、拒否不安、ハードルの低さとの間に相関が認められたが、継続義務感、炎上容認、情報共有との間には、相関が認められなかった。Young (1998) の言うような依存的なインターネットの使用は、SNS 上で、ネガティブな感情を表出する一方で、他者との比較によってネガティブになってしまう使用態度や、SNS 上で賞賛されることを希求したり、拒否されることを不安に感じたりするような使用態度とは関連するが、SNS 上でのやり取りは継続しないといけない、といった義務感や、SNS 上での炎上を容認するような使用態度とは関連しないことが明らかとなった。近年、インターネット上での「炎上」がメディア等にも取り上げられることが多いが、IAT 得点の相関を鑑みると、こうした炎上はインターネット依存傾向をもつことに起因するわけではないと考えられるかもしれない。一方で、承認されたい欲求については、それが依存的な使用につながる可能性が高いことが示されたと言える。

表2 SNS 使用態度尺度と IAT (川上・井上, 2023 による) との相関係数

	IAT平均	囚われ	本業劣後	依りどころ	過剰使用	ネット優先
ネガティブ表出	.582 **	.304 **	.451 **	.447 **	.322 **	.354 **
依存的使用	.605 **	.362 **	.497 **	.336 **	.535 **	.173
対比ネガティブ	.351 **	.130	.433 **	.212 *	.203 +	.013
賞賛希求	.485 **	.321 **	.473 **	.218 *	.378 **	.255 *
拒否不安	.354 **	.259 *	.332 **	.213 *	.184 +	.129
暴露不安	.225 *	.063	.310 **	.167	.098	.046
ハードルの低さ	.512 **	.235 *	.391 **	.456 **	.410 **	.167
継続義務感	.115	.104	.117	.110	.059	-.034
炎上容認	.000	.077	.045	-.027	.036	-.105
情報共有	.190 +	.083	.053	.114	.214 *	.069

また、ハードルの低さとの間には相関が認められるが、情報共有との間には、相関が認められなかった。ハードルの低さや情報共有は、「使いやすいから使う」、「情報共有に便利だから使う」といった、比較的ニュートラルな使用の「理由」であると考えられる。ハードルの低さと相関が認められていることは、使いやすいから使っているということが、インターネット依存とも捉えられる過剰な使用につながりやすいことを示している。

一方、情報共有に便利、という使用の目的が明確な使用の場合には、過剰な使用には繋がりにくいのかも知れない。こうした傾向は、IAT を下位尺度に分けて行った検討においても概ね示されているが、下位尺度としての「過剰使用」については、情報共有と $r = .214$ の相関を示しており、この相関をどのように解釈するかについては、注意が必要であろう。今後、さらにデータ数を増やして検討することが必要であると考えられる。

また、IAT 下位尺度の囚われは、依存的使用との相関が認められるが、同じく下位尺度のネット優先については、そうした相関が認められない。つまり、SNS 態度尺度における依存的使用は、必ずしも対人関係よりも SNS 等を優先するという態度を表しているのではなく、たとえば、どんな場面でもインターネットのことに想いを馳せるような態度を表していると考えられる。そして、このネット優先が、ネガティブ表出と関連していることは、対面での対人関係を回避しつつ、ストレスに感じることを SNS 上で発信することでカタルシスを得るといった、対人関係を避ける傾向の存在を示している可能性もある。さらに

は、成すべき本業を後回しにして、インターネットを使用してしまふ、本業劣後については、ネガティブ表出や賞賛希求とも相関が高く、SNS 上でネガティブな感情を表出してカタルシスを得ることや、他者からの賞賛を得ることで満足を感じるという態度が、この成すべき本業を後回しにしてしまう傾向と関連していることが示唆される。すなわち、こうしたカタルシスや満足感が高いことがもたらす快が、本業を成すことよりも、インターネットを使用することを選択、選好することにつながるのだと考えることができる。

本研究から、インターネットの依存がどのような態度と関連しているのかについての知見を得ることができたと考えられる。ただし、本研究の結果は、調査対象者も少なく、相関についての分析のみを行っており、より多くのデータに基づく詳細な検討が必要であるとされる。また、IAT の因子分析を行った川上 (2022) と川上・井上 (2023) とでは、若干異なる因子分析結果が得られている。川上 (2022) では高校生、川上・井上 (2023) では大学生が調査対象とされており、こうした対象者の年齢あるいは属性が、因子分析結果の差異につながった可能性もある。したがって、十分なデータ数を集めるとともに、対象者の年齢あるいは属性ごとに、検討を行うことも必要であろう。また、井上・川上 (2022) は、質問紙によって測定される、主観的なスマートフォンの使用時間と、スマートフォンのアプリの使用状況に基づく客観的な使用時間との間にズレが存在することを明らかにしている。そうした意味では、Young (1998) の IAT で測定されるインターネット依存の傾向性について、それがどの程度客観的に正確なものであるのかについては、疑問

の余地もある。こうした点を考慮した、客観的な依存傾向の測定なども併せて、今後、より多くのデータの蓄積、分析の蓄積が求められる。

引用文献

青山 征彦 (2018). 大学生における SNS 利用の実態: 使い分けを中心に 成城大学社会イノベーション研究, 13, 1-17.

Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155-159.

藤 桂・吉田 富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響: ウェブログ・オンラインゲームの検討より 社会心理学研究, 25, 121-132.

藤井 壽夫 (2019). 本学学生におけるネット依存傾向と愛着スタイルとの関連について 函館短期大学紀要, 46, 23-32.

藤井 勇仁. (2021). Instagram の使用方法が幸福度に及ぼす影響についての検討 初等教育論集, 22, 122-133.

二口 尚美・岡崎 草代夏・田林 暁一・鈴木 寿則 (2020). A 短期大学看護学科1年生の SNS 使用状況とリスク認知、ネットトラブル経験に関する調査 研究紀要 青葉 Seiyo, 1, 21-27.

Griffiths, M. (2005). A 'components' model of addiction within a biopsychosocial framework. *Journal of Substance use*, 10, 191-197.

濱口 佳和・金子 楓 (2021). サイバー・アグレッション尺度の作成及びその心理的ストレス反応との関連の検討 筑波大学心理学研究, 59, 25-35.

飯田 昭人 (2020). 大学生における SNS 使用状況と連帯感, 社会関係資本, 人生に対する積極的態度との関連: LINE, Twitter, Instagram を検討材料として 北翔大学短期大学部研究紀要, 58, 1-12.

稲垣 俊介・和田 裕一・堀田 龍也 (2017). 高校生におけるインターネット依存傾向と学校生活スキルの関連性とその性差 日本教育工学会論文誌, 40 (Suppl.), 109-112.

井上 真理子・川上 正浩 (2022). 大学生における iPhone の主観的使用時間と客観的使用時間— iPhone のバッテリー機能を用いて— 心理学の諸領域, 11, 1-10.

井上 拓哉・小嶋 秀幹 (2018). 保健福祉系大学生の

インターネット依存傾向と精神的健康の関連 福岡県立大学心理臨床研究: 福岡県立大学心理教育相談室紀要, 10, 15-18.

伊藤 賢一 (2011). 中高生のネット利用の実態と課題 群馬大学社会情報学部研究論集, 18, 19-34.

片山 友子・水野 (松本) 由子 (2016). 大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性 総合健診, 43, 657-664.

川原 正人 (2021). ネット依存尺度の因子構造に関する検討 東京未来大学研究紀要, 15, 25-34.

川上 正浩 (2022). インターネット依存尺度 (IAT) の検討—女子高校生を対象として— 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 16, 41-51.

川上 正浩 (2023a). SNS 使用態度に関する尺度の構成 (1) 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 17, 37-46.

川上 正浩 (2023b). SNS 使用態度に関する尺度の構成 (2) 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 17, 47-55.

川上 正浩・井上 真理子 (2023). インターネット依存尺度 (IAT) の検討—大学生を対象として— 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 13, 37-46.

北田 雅子 (2019). 大学生のインターネット利用と依存傾向について. 札幌学院大学総合研究所紀要, 6, 7-16.

北見 由奈・清水 安夫 (2019). スマートフォンを媒体としたソーシャルメディアの利用に伴う恩恵と負担に関する研究—テキストマイニングによる探索的検討— 学校メンタルヘルス, 22, 162-170.

久保 昌平・坂田 桐子・清水 裕士 (2015). 青年におけるアイデンティティ確立と SNS の利用および依存との因果関係の検討 広島大学大学院総合科学研究科紀要 I 人間科学研究, 10, 9-16.

前田 彩花 (2021). SNS 疲れによって引き起こされるネガティブ感情について 甲南女子大学大学院論集, 19, 37-48.

正木 大貴. (2018). 承認欲求についての心理学的考察: 現代の若者と SNS との関連から 現代社会研究科論集: 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要, 12, 25-44.

松島 公望・石川 亮太郎・林 明明・橋本 和幸・毛利

- 伊吹・中村 裕子・石垣 琢磨・宮下 一博 (2017). 大学生版スマートフォン依存傾向尺度作成の試み 千葉大学教育学部研究紀要, 66, 283-291.
- 松田 剛 (2020). 心理学専攻の学生を対象とした情報端末利用実態調査 関西大学 IT センター年報, 10, 3-13.
- 宮城 妃葉・網内 詩帆・萩 彩乃・高木 ルリ子・花田 裕子・永江 誠治 (2020). 看護大学生におけるインターネット依存傾向とインターネット利用状況との関連 保健学研究, 33, 35-45.
- 宮代 こずゑ (2019). 大学生の Twitter 利用に関する予備的調査: 自己概念に着目して 宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 6, 57-63.
- 内閣府 (2021). 令和 2 年度青少年のインターネット利用環境実態調査 Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r02/net-jittai/pdf-index.html> (2023 年 7 月 28 日)
- 内閣府 (2023). 青少年のインターネット利用環境実態調査 Retrieved from https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/net-jittai_list.html (2023 年 7 月 28 日)
- 中村 信次 (2017). 大学生における SNS 利用と自己表出傾向との関連 日本福祉大学全学教育センター紀要, 5, 1-12.
- 西村 洋一 (2020). 大学生の友人関係における LINE の利用: 自己開示の深さおよび効用認知に注目して 聖学院大学論叢, 32 (第 2), 127-141.
- 西村 洋一・遠藤 健治 (2009). 高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討—対人不安傾向、性別を要因とした分析— 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2, 41-53.
- 能仁 結衣・村上 勝典・宇都宮 真輝 (2022). SNS 利用行動尺度作成の試み 岡山心理学会第 69 回大会発表論文集, 27-28.
- 小倉 正義・藤本 優紀 (2019). LINE 利用に関する不合理な信念尺度の作成の試み—大学生・大学院生を対象に— 日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集, 325.
- 大野 志郎 (2019). SNS 依存および諸問題と利用動機との関係 逃避、優越感、共感によるリスクの比較 情報教育ジャーナル, 2, 10-17.
- 岡安 孝弘 (2016). 高校生のインターネット利用行動とインターネット依存、精神的健康の関係 明治大学心理社会学研究, 12, 17-30.
- 佐久間 浩美 (2020). 中学生の SNS 及びインターネット利用の実態に関する検討 了徳寺大学研究紀要, 14, 45-54.
- 佐久間 浩美・池谷 壽夫・江黒 友美・菅沼 徳夫 (2021). 中学生の SNS 及びインターネット利用の実態に関する検討 第二報 了徳寺大学研究紀要, 15, 97-112.
- 澤井 智哉・福岡 欣治 (2018). 大学生のインターネット利用動機とインターネット依存傾向の関係 川崎医療福祉学会誌, 28, 77-87.
- 正司 哲朗・吉村 治正 (2020). ウェブ調査の設計と大学生を対象としたスマートフォン利用実態に関する調査 奈良大学紀要, 48, 99-111.
- 高谷 邦彦 (2017). ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか?~女子学生の利用実態~ 名古屋短期大学研究紀要, 55, 13-27.
- 瀧 一世 (2013). インターネット依存とその測定について~インターネット依存傾向尺度作成の試み~ 奈良大学大学院研究年報, 18, 83-91.
- 田ノ上 実沙・田邊 敏明 (2020). インターネット依存傾向における使用目的と日常生活スキルとの関連性 山口大学教育学部研究論叢, 69, 21-28.
- 豊田 充崇 (2015). 中・高校生のスマートフォン・インターネット利用実態に関する調査研究 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 25, 9-16.
- 津田 朗子・木村 留美子・水野 真希・喜多 亜希子 (2015). 小中学生のインターネット使用に関する実態調査: 親の把握状況と親子間の認識の違い 金沢大学つるま保健学会誌, 39, 73-79.
- 都筑 学・村井 剛・早川 みどり (2020). 大学生におけるスマートフォンの利用とその心理的影響に関する研究 中央大学保健体育研究所紀要, 38, 1-30.
- 若山 公威 (2019). 大学生の Twitter 利用状況分析 名古屋外国語大学論集, 4, 71-82.
- 山下 晃弘・松林 勝志 (2015, August). 学生の SNS 利用実態の調査とプライバシー漏洩リスク評価に関する検討 IEICE Conferences Archives. The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers. 情報科学技術フォーラム第 2 分冊, 367-368.
- Young, K.S. (1998). *Caught in the Net: How to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recovery*. New York: John

Wiley

鄭 艶花・野島 一彦 (2008). 大学生の<インターネット
ト依存傾向プロセス>と<インターネット依存傾
向自覚>に関する実証的研究 九州大学心理学研
究, 9, 111-117.

Examination of the Relationship between Attitude toward SNS Usage and Internet Addiction Test.

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Masahiro KAWAKAMI

Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Science, University of Toyama

Mariko INOUE

Abstract

Kawakami (2023a, 2023b) constructed a comprehensive scale that can measure Attitude toward SNS Usage with data of high school and university students. This scale consists of “To Express Negative Feelings”, “Dependent Use”, “To Contrast with Others and Be Negative”, “To Seek Praise”, “Rejection Anxiety”, “Anxiety for Exposure”, “Low Hurdles”, Sense of Obligation to Continue”, “Acceptance of Backlash”, and “Information Sharing”. On the other hand, Young's (1998) Internet Addiction Test (IAT) is a scale for measuring the degree of Internet addiction. Kawakami & Inoue (2023) administered IAT to university students, and factor analysis was conducted on the data. As a result, five factors were extracted: “Captured”, “Postponing Main Duty”, “Internet as Haven”, “Excessive Use”, and “Internet Priority”. In this study, we examined the correlation between Kawakami's (2023a, 2023b) SNS usage attitude scale and Young's (1998) IAT. The results of the correlation analysis showed that “Backlash” on the Internet is not necessarily caused by a tendency to become addicted to the Internet use.

Keywords: Internet Addiction, IAT (Internet Addiction Test), Attitude toward SNS Usage, Backlash